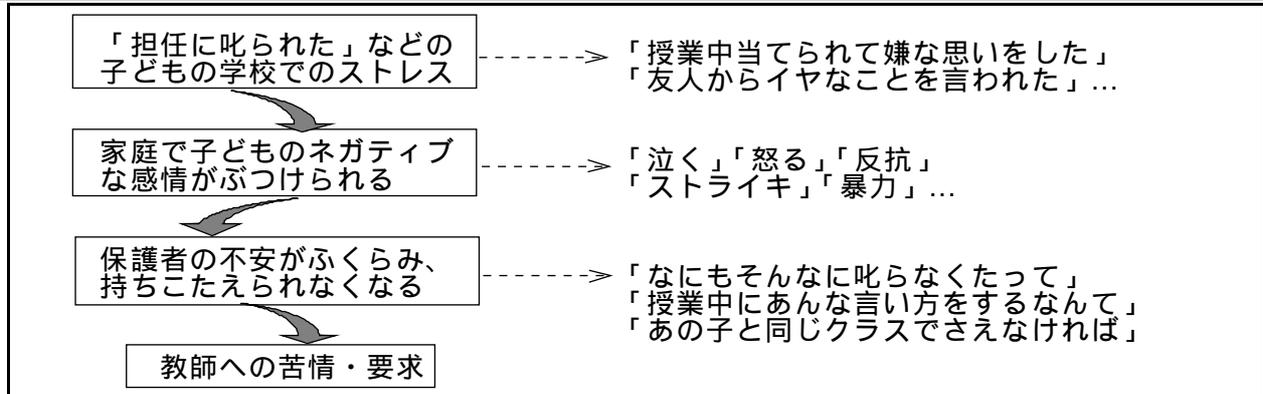


保護者への寄り添い方(2)

保護者と教師の連携・協働は、子育て・教育の専門家同士として「同じものの見方をして、異なる仕事(役割)を遂行すること」と考えることができます。学校教育の専門家である教師には、保護者との対話の「文脈」を規定している自分たちの「見方」や「前提」を、もう一度チェックしてみることが必要と言えましょう。

苦情や要求の構造



苦情・要求への対応

「どのようなネガティブな感情が、親にぶつけられたのか」を丁寧に聴き取り、実際に子どもが困っていること、保護者や家族が困っていること、心配していること、不安なことは何かを「なるほどそう感じたのですね」と共感的に聴く。

怒っている相手にお詫びの言葉をかけることは、その場での関係性をつくるために重要。「叱ってすみません」「当ててすみません」ではなく、「お母さんにつらい思いをさせてしまってすみません」「お母さんに大変なご苦労をおかけしてすみません」と、相手の感情や大変さを認める、ねぎらう形でわびると、気持ちを開いてもらうのに有効。

保護者の不安を受容し、「学校でもお子さんによく手をかけるようにします」「とても大切な情報をいただいて、お子さんのことをよく理解することができました」と言って、家族が子どものことを一番よく知っているという文脈をつくる。

怒りや不安を含めて、自分の思いを教師から受容された、わかってもらえたと思えると教師を信頼しポジティブな見方をもつようになる。

担任への苦情は、まず担任以外の第三者(学年主任、教育相談担当者等)が受けるようにする。急に、担任(当事者)が相

手の怒りを受け取ると、ゆとりをもてなくなり、相手の不安やつらさを共感的に受けとめることは困難になる。

家庭訪問の留意点

訪問する時間帯を考慮する。ゆったりと、笑顔で、短めの訪問を繰り返す。訪問と登校を結びつけない。お互いよく知らない場合、子ども本人についてのことや学校のことにはふれない(「よく知らないくせに」などと思われる)。子どもが好きなことや大切にしていることを聞いたり、ほめたりすると、自分自身がほめられたような気になる。会っても取りつく島がない時は、笑顔で「またね」と言って、パッと切り上げる。長期にわたる不登校の場合、子どもに会うことより、母親の話をしじっくり聞き、母親の考えや思いを理解することも重要。子育てに問題があると思われても、教師から指摘したり、説教したりしない。我が子のダメさを親が言っても、「よそのお子さんもそんなものですよ」と言って親をなぐさめ、元気づけることが大事。「何か困ったことはありませんか」「何かして欲しいことはありませんか」と笑顔で聞く。本人に会えなくても、家庭訪問の後、母親が元気になったり、「先生に来てもらったよ」とうれしそうに子どもに伝えてもらうことが続けば、子どもの気持ちも変化する。